

# キャンヘルプタイランド

## ネットワーク通信

2010年7月31日発行 第50号

バンコク便り

タイ・バンコク在住の西川会長から

バンコクの繁華街を占拠して続けられたタクシン元首相派の反政府集会が軍隊によって強制排除されてから、早いもので2ヶ月以上が経ちました。今思えば、あれは夢だったのかと思うほど、最近のバンコクは静けさを取り戻しています。

政治的な考察は別にして、強制排除に始まったバンコクの非常事態を少し振り返り、そのときに感じたことをいくつか書き出してみたいと思います。

1. 強制排除前。電車、地下鉄は早々と運行休止。通行止めの道路も増え、職場へのアクセスが徐々に制限される。電車、地下鉄がないと本当に不便。
2. 強制排除始まる。首都で戦争なみの非常事態が起きたら、日本なら即通常の番組は中止して、緊急特番を組むところだろうが、こちらでは、ほぼ通常通りの編成。ニュース枠が拡大されたような気もするが、ドラマもバラエティー番組も中止せずに普通にやっけていてびっくり。
3. テレビでは銃撃戦。同僚宅近くでも銃撃戦が始まり一歩も外に出られないとのこと。翻って、私の自宅周辺はいつもと変わらぬ平和な毎日。そのギャップに奇妙な感覚を覚える。
4. 単身者用のアパートが密集していて語学留学生や現地採用の日本人も大勢住んでいるエリアで銃撃線が始まる。ラチャプラロップ通りが実弾使用許可地域に指定される。ラチャプラロップ通りとそれに隣接するランナム通りに同僚5人が在住。銃撃の間を縫って避難させる。他にも多くの日本人が取り残されたはずだが、日系のメディアにはほとんど取り上げられず。軍が脱出の手助けはしてくれただが、行くあてのない語学留学生などはあえてアパートに残って収束を待った人も多かったらしい。日系メディアにとって邦人居住地域とはあくまで企業駐在員が住むスクンビット地区だということを知った。
5. テレビで頻りに平和維持本部（政府）が情報提供。2日目には英語字幕がつき、その後はタイ語、英語2ヶ国語で発表されるようになる。情報弱者への配慮に拍手。日本でこうした事態に外国人のために外国語で迅速な情報提供が行なわれるだろうか。
6. デモ隊幹部が投降し、一部参加者が暴徒化。私はデパートで買い物中。デパートが緊急閉店。電車はもちろんバスも運行停止。タクシーもつかまらず帰宅難民に。車を持っている人が羨ましい。
7. 繁華街からずいぶん離れた自宅にも焦げた臭いが漂ってきた。後でセントラルワールドが炎上したと知る。
8. セントラルワールドが炎上。セントラルグループに買収されるまでは、「ワールドトレードセンター」という名前だった。ここが燃えたことで9.11を想起した人も多いよう。バンコクのランドマークとも言えるショッピングセンターなので、ショックを受けたバンコクっ子も多い。私自身も思い出のいっぱいだった所だったのでショック。
9. 夜間外出禁止令発令。気味が悪いほど静か。心なしか空気も澄んでいるような気が。バンコクにこんな静けさは似合わない。
10. デモが収束した翌日、早速、街を清掃するボランティアが組織された。おそろいのTシャツまで準備されていて、その準備周到さに驚きを通り越して啞然とする。
11. 週明け、地下鉄、電車も運行再開。私も出勤。地下鉄シーロム駅を上がる。膨大な数のタイヤを積み上げて作られたバリケードが跡形もなく消えていて、夢から覚めたような感覚に。
12. 翌週末、シーロム通りを歩行者天国にして、マーケットが開かれる。店を焼かれた人たちの救済策とのことだが、コンサート会場も設けられ、まるでお祭り騒ぎ。先週まで戦争状態だった通りで、次の週にお祭り騒ぎとは、タイ人の切り替えの早さに脱帽。

以上、雑感を書きなぐってみました。私にとっても貴重な経験でしたが、できれば一度限りの経験であってほしいと思います。

西川

活動報告 1

～2010年度奨学金授与式の報告～

報告者 大矢 治夫

月日	出発地	到着地	移動距離	授与式1	人数	授与式2	人数	計
6/29	名古屋	バンコク	航空機					
6/30	バンコク	サコンナコン	航空機					
6/30	サコンナコン	ムクダハーン	120km	サコンナコン	17人			17人
7/1	ムクダハーン	サコンナコン	200km	ムクダハーン	6人	ナコンパノム	16人	22人
7/2	サコンナコン	カラシン	220km	ロイエットのブンガーム学校訪問				
7/3	カラシン	ロイエット	80km	カラシン	16人	マハサラカーム	16人	32人
7/4	ロイエット	シーサケット	230km	ロイエット	16人	ヤソトーン	15人	31人
7/5	シーサケット	プリラム	250km	シーサケット	21人	スリン	20人	41人
7/6	プリラム	サケーオ	200km	プリラム	17人			17人
7/7	サケーオ	バンコク	200km	サケーオ	19人			19人
7/8	バンコク	名古屋						
		計	1500km				計	179人

2010年度の奨学金授与式はタイ東北地方11県を6月30日～7月7日の8日間で訪問しました。ドナーの皆様のお気持ちを227人の子どもたちに直ける事が出来ました。私にとって4年ぶりに訪れた奨学金授与式の東北地方は見飽きることのない、美しい田園風景をそのままに、懐かしい人たちとの再会と、心弾む8日間を、イサーンの風に吹かれて1500kmの旅でした。



今回の授与式ルートは東北地方の北に位置するサコンナコンまで国内航空で北上し、そこから11の県を訪問しながら南下して、カンボジア国境に近いサケーオを最後にバンコクに帰るルートでした。

今回の授与式には私のほかに4人のドナーが同行されました。4人のドナーは奨学金プログラムの実態と、奨学生の生活環境を直接見聞することでした。4人のドナーはサコンナコン、ムクダハーン、ナコンパノムの3箇所の授与式に参加して、7月2日にサコンナコンでお別れしました。

一行は自力でバンコクへ戻り、5月の騒乱の跡地や、古都アユタヤなどを視察され、7月5日に帰国されました。奨学金授与式同行への感想文を寄稿くださいました。

～美しいイサーと人々の暮らし～

4年ぶりに訪れたイサーの大地は緑の大海原の形容が相応しいと感じます。しかしよく見ると赤い表土がむき出しの、水の入っていない水田がいたるところ広がっているのです。雨季に入って1ヶ月もなるのに、田植えのすんでいない、水田に水が入っていない所がずいぶん多いのには驚かされました。日本ではほとんどが5月末までに田植えは終わっています。授与式で教育委員のスタッフに田植えの事を尋ねると、何処も今年は異常で雨季に入っても東北地方はほとんど雨が降らず、北の内陸部

ほど濁水で濁水が続くと生活水の確保も心配、との話でした。

「タイ・東北地方の田園風景は世界一美しい」と勝手に決めている私ですが、水田に水が無く、赤い表土もむき出しで、苗の植えつけもしていない水田は荒涼として無残でした。

現代の日本では天水に頼る稲作は存在しません。水田の水管理は灌漑用水路による管理が徹底しています。1960年～1980年にかけて莫大な国費を投入して耕作地の隅々まで灌漑用施設を建設しました。目的は米の国産100%の自給です。日本農業の食料自給率は45%以下が現状です。「不足は外国から買えばよい」の方針は本当に大丈夫？

今から30年ほど前、冷害の凶作でお米が不足して大騒ぎになりました。タイからお米を輸入して、大勢の日本人がタイ米に始めて接しました。いがいに美味いと評判になった事を思い出します。

タイ東北地方の米作のほとんどが天水に依存した農業です。それに加えてイサーン地方特有の極めて排水性の高い土壌は保水性に乏しく、稲作には極めて不向きな条件です。そんな条件の悪い水田にも、稲作の生育サイクルに見合った天候で、雨水が田畑を潤すの



です。将来灌漑施設が完備して、必要なときに水が得られたとしたら、1年に2回の収穫は間違いない恵まれた気候風土のこの地が、今以上に豊かになれるかと、訪問するたびに期待する私です。

今から40年前に日本の稲作が天水依存の農業から脱出したのも、先人や、私達高齢者世代の大変な努力によって、現在に至っているのです。

タイのこの地が豊かな米づくりの地域として生まれ変わるためにはこの地で生まれ、育つ、子ども供たちが自らの力で切り開くことになるのでしょう。そんな子どもたちに私たちが今出来る事、奨学金がその答えの一つであれば嬉しい事です。

今回サコンナコン～サケーオ～バンコクの1500kmを走破しました。車窓から見るイサーンの風景は以前と変わらず、美しい風景を車窓から堪能しました。授与式が終了して町のホテルに到着すると、時間の許す限り、市場や、町の賑わいに触れることを、楽しんできました。そこで人々の暮らしぶりに少しでも触れる事が出来たらと思うのです。

タイの道路網は地方へ行ってもよく整備されていて、何時も感心させられます。

道路網の整備に比較して、鉄道網の貧弱さは信じられないほどです。人々の生活にとって車の依存は日本以上で、3年前に比べてもバイクの依存から車へと大きく変わったと感じました。それだけ所得も増えて、生活スタイルも変化しているのでしょう。しかし

田舎の人々の暮らしがそのことで豊かになったとは、決して云えないのが実感です。

生活スタイルが益々便利さを求め、現金収入の道が閉ざされた田舎から、都会や、リゾート地、はては外国への出稼ぎへと、依存せざるを得ない環境は、しばしば家庭崩壊の原因です。そして何時も子供が犠牲になる、東北地方の何処にも見られる構図があります。

日本でも今から50年ほど前の1960年ごろには、地方から都会へ就職する15歳～18歳の子供たちが集団就職列車で故郷を後にする風景が日常のことでした。その子供達は「金の卵」と言って、その後の日本の経済発展の貴重な労働力として貢献したのです。

日本の当時の東北地方は、農業収入以外の雇用の場が無く、今のタイの東北地方の現状と重なります。

## ～懐かしい人たちとの再会～

私にとって3年ぶりの訪タイで、懐かしい人たちとの再会は心弾む出来事です。

奨学金授与式で出会った子どもたち、お世話になった各県の教育委員会のスタッフの皆さん方、そして今回は3年前にワークキャンプで訪れた学校を訪問して、完成した集会場兼体育館の使用状況を確認することも大切なことでした。日程の詰まった授与式の道中で過去のワークキャンプ実施学校訪問は簡単には出来ません。今回は7/2日が移動日で授与式の無い日程が幸いし、ロイエットにあるブーンガム学校訪問が実現しました。そしてロイエットにお住まいで会員の亀山さんご夫妻にお会いするのも楽しみの一つでした。

6/30日のサコンナコンの授与式では2006年の授与式で家庭訪問した当時、中学3年生だった「イエン」



さんがすっかり大きくなって、私とおなじ背丈になり、今では高校3年生になったといました。当時将来はお医者さんになりたいと言っていた「イエン」は夢に向かって勉強している様子で、握手して、はにかんで笑うのでした。

7/2日には授与式同行の4人をサコンナコンの空港に見送り、一路ロイエットのブーンガム学校へ向かいました。チャーターしたリムジンの運転手は地方の幹線国道をフルスピードで飛ばします。全幅4車線の道

路が緑の大地を分けて滑走路の様に直線に伸びた道路を100km/h～120km/hのスピードで飛ばします。幹線道路は平面交差がほとんどなく、全てランプ乗り入れの為、都市部周辺以外は信号はほとんど見当たりません。高速道路なみの走行が可能でした。むしろそんなスピードで走る車はほとんど見当たりません。私達の車を追い越して行ったのは1台のセダンだけでした。

こうして120kmほどの移動に1時間30分ほどで到着しました。高速道路でもない一般道路を時速80km/hで移動するなどは日本では考えられないことです。

14時30分ごろに訪れたブーンガム学校は緑滴る樹木に囲まれて、3年ぶりに私を迎えてくれました。そしてグラウンドの東側に私たちが子どもたちや、先生、村人と建設した建物が午後の日差しの中に建っていました。



木陰に車を寄せると、見慣れた笑顔の校長先生や、国語の先生、英語の先生、皆笑顔で“Haruo”と声がかかりました。私がナップザックから当時の写真を取り出して皆に披露すると、“Takumi・Tateyama・Ebisawa”などとキャンプメンバーの名前を呼ぶのでした。

いつの間にか集まった生徒が周りを取り囲むと、校長がマイクで生徒全員集会場に集まるようアナウンスを出します。私と、むさん・亀山さんの3人を歓迎

する臨時集会がはじまりました。その中で校長は、3年前のワークキャンプで見た日本人の行動について、いつも時間を守って行動する日本人のように、私たちタイ人が時間や規則を守って行動できたなら、きっと日本のような発展した国が作れる、と生徒に教えている。ワークキャンプの2週間は時間や規則を守って行動するお手本であった。と生徒に伝えるのでした。

私には当時のワークキャンプの思い出では、子どもたちや、村人たちの交流が楽しくて、建設作業は半分

遊びの様な感じで、人のお手本になるなんて、気恥ずかしいことでした。

奨学金授与式の会場でも付き添いの先生の質問で、日本人は規則正しく行動していつも勤勉に働くが、どうしてそんな行動が出来るのか、と質問されました。規則正しく時間を守って行動するのはそうすることで効率よく行動できるし、人に迷惑をかけない事が大事なことです。教えます。と言って、どうして勤勉にはたらくの、との質問には「勤勉な人ばかりではありません。」と答えたのを思い出します。1時間程生徒達と交流後、生徒たちに連れられてホームステイした部落を訪問して、居合わせた村人に挨拶し、再会を喜びました。亀山さんご夫妻とも再会し、名残惜しんでお別れしました。

### ～タイの子どもたちと奨学金～

2010年度の奨学金支援数は179人でした。

継続奨学生が135人、新規奨学生が40人弱の選定で（昨年度比、欠席あるいは中退者が多い）男・女比率はおおよそ3・7で女子生徒が多く選抜されています。

特に恣意的に女子生徒を多く選抜している様子はなさそうでした。奨学金を授与されるかどうかの選択は、各県レベルの教育委員会からの情報を元に、学校長を通じてクラス担任の先生に情報が流れ、生活に困窮している生徒が奨学金支援対象者として申請されます。



現在11県に支援している奨学生は1県平均20数人で、そのうち継続奨学生を除くと新規奨学生は1県当たり3人～4人枠で、200校以上の小・中・高校からの選抜は本当に狭き門なのです。

日本と同じ教育制度のタイは中学校までが義務教育で、高校の無料も2年ほど前から実施された様子で、このことは日本より進んでいます。日本の高校無料化はご承知のように今年度より実施に移されました。

タイでの義務教育や高校の無料化は授業料・教科書の無料配布が中心です。通学費用・制服代・学校給食費の一部は個人負担です。国から支給される教育費は学校長の裁量で、地域の経済状況によって運営が異なります。都会に近い、地域が比較的豊かな村の小学校では、学校給食はお代わり自由で、食べ盛りの子供たちにはうれしい制度でした。

寒村の米以外の農作物が取れない貧しい地域の学校では自宅から「ごはん」を持参して、給食では「おかず」だけ支給する学校も見受けられました。

キャンの奨学金は小・中学生2,000パーツ・高校生は3,000パーツの支給ですが、ラーメン1杯20パーツの田舎では日本の感覚なら5万円～8万円の値打ちです。

現金収入の雇用が少ない田舎では農作業の手伝い仕事の日当は100パーツ程度と聞くのです。奨学生がどのような生活をしているか、今回の授与式で6人の新規学生の家庭訪問をいたしました。訪問先はサコンナコン中1女子・母子家庭・叔父 ナコンパナム 小6女子・母子家庭・姉ヤソトーン小6女子・両親と子供13人家族、小6女子・母子家庭・祖母 プリラム中1女子・



母子家庭・祖父母 サケオ小 6 女子・両親(父・不自由)・兄の 6 家族でした。

引率の校長先生の話では、同じような境遇の子どもが小学校 150 人ほどの中に 10 世帯ほど存在すると言うのでした。授与式の冒頭に挨拶する教育委員会の責任者は支援希望者は数百人に及びと云い、奨学金支援の継続要請するのでした。

私は授与式の挨拶で、「このお金は勉強するために使うお金で、自分の楽しみや、他人の楽しみのために使わないで下さい。貴方を支援するドナーもきっとその様に思っています。

しっかり勉強してね。」と励まして奨学金を渡します。しかし、家庭訪問をして間近に子どもたちの生活環境を見ると、奨学金がたとえ生活費に使われたとしても、奨学金が支援されている間は、きっと親は子どもを学校に通わせることを選択するだろうと期待するのです。

男の子は学歴が乏しくても、健康で、強靱な体力さえあればなんとか生きていける。しかし女の子で、基本的な学力もなく、非力な女性が、どんな職業に就く事ができるのかを一番身近に心配してくれるのは先生なのです。とコーディネーターのむさんの言葉が実感として迫るのでした。

今回の家庭訪問では 6 家族のうち 4 家族は母子家庭でした。父親のいる 2 家族のうち 1 家族の父親は身体が不自由で、仕事が出来ません。もう一組の両親の揃っている家庭は両親と子ども 11 人の大家族で、子どものうち 9 人は親戚の子供を引き取っている家庭でした。

親戚の家族も母子家庭の様でした。離婚や、父親の死亡など、母子家庭の環境が子供たちに困難な状況を強いるのでしょう。これは日本でも同じ構造と見受けますが、タイに比較して社会保障が困難さを緩和しているのも事実です。タイでは低所得者に対する生活保護制度は貧弱で、ほとんど機能していないと付き添いの先生は話しました。

今年 5 月に発生したバンコクでの騒乱も、根底には都市部と地方の所得格差の拡大や、脆弱な社会保障制度への不満が騒乱の一因と考えるのです。キャンの奨学金がタイの脆弱な社会保障の受け皿として利用されても、1 人の子供の基本的な人権が満たされることで十分な成果と考えるのです。

今年はキャン設立 20 年を迎えます。20 年の歳月はタイの国情を大きく変えてきました。この間の経済的發展は目を見張る状況です。それと同時に国内の所得格差がいろいろな問題をもたらします。情勢の変化に応じてキャンの支援の方向が変わるのも当然のことでしょう。奨学金プログラムもまた新たな展開を迎える年となりそうです。

## 2010 年度奨学金授与式同行記一

～Thailand への初めての旅～

関本 茂・利英

私たち夫婦は、初めてタイを訪れる機会を持ちました。日本よりはるか南に位置し、赤道に近い国であり、常夏の国というイメージを持っていました。

タイという国に対する印象は、日本からの飛行機(TG645 便)の窓から見た時なんと緑の多い国という印象でした。Bangkok 国際空港に降り立ち、タクシーで TK パレスホテルに向かう途中でも同じ印象を持ちました。個人の家の周りはもちろん、集合住宅、ホテルの周りにも樹木が生茂り、緑が一杯でした。東京も緑が多いと思っていましたがとても比較にならない程の緑でした。道路も整備されていて、道幅広くとられていました。ただ自動車の数は相当なもので、しかも車の運転は荒っぽくアクロバットの様な感じでした。パレスホテルに着いて少し休憩した後、ムさんに案内されて、徒歩 10 分程のレストランで夕食をいただきました。鍋料理がメインで、野菜たっぷりの料理をいただきました。スパイスは辛いと聞いていましたが、

辛くないものと激辛の 2 種類あって、とても美味しくいただきました。

翌日、Donmuang 空港からタイ東部の Sakon Nakhon に向かいました。

この時プロペラ機に始めて搭乗しました。ジェット機と違って何となく人間的な感じがしました。

S・Nに到着して車で教育委員会の事務所へ行き、初めての奨学金授与式に出席しました。20 数人の中・高校生と保

護者および先生がおられました。子ども達の様子を見てみると、皆無駄口を叩く訳でも無く、おとなしうでした。しかし目の輝きが決定的に違って、キラキラと輝き、勉学への意欲がとても強く感じられました。奨学金を授与されている子供達は成績も良く、まじめに勉学に励んでいる生徒達ですが、経済的には苦しい家庭が多いと聞かされていました。事実、授与式後に家庭訪問した女子中学生の家は想像以上の状態でした。学校の先生になりたいという希望を持っている彼女が、成人したときに望みが叶うように心の中で祈りました。



その日は MukdaHan へ移動しました。地方の道路は B・kk とは多少様子が違っていましたがよく整備されていました。都市部以外は自動車の数も少なく走りやすく感じました。

次の日は M・H の授与式を終え、Nakhon Phanom へ移動し、教育委員会事務所で授与式に参加しました。N・P

では今までと雰囲気が違ってました。

ムさんの説明に対し、今までは質問や意見はほとんど出ませんでした。ここでは高校生や保護者の中から質問や意見が出ました。積極的な交換の場を見られて、大変新鮮に感じられました。

その日は S・N へ戻り宿泊。次の日に大矢さんやムさんにと別れ、バンコクに戻りました。7月3日・4日とアユタヤや王宮を見学して7月5日に帰国しました。

タイは気温が高かったですが、カラットとしてすごしやすかったです。機会があれば又訪れてみたいと思いました。

合掌の、タイのこどもら、目の涼し。炎屋の、ソウ引かれ行く、大通り。



## 2010 年度奨学金授与式同行記一2

～ 奨 学 金 授 与 式 に 参 加 し て ～  
久保 とし子

6月30日、私たちは Sakon Nakhon の空港に着いた。私達を歓迎するかのように、雨季にもかかわらず強い太陽が輝いていた。何もかもが初めての体験で、町の中の小さな食堂さえも珍しくて楽しい。タイの麺をお昼に食べた。酸っぱくて辛いだけ、と云うタイ料理のイメージがこの時から消えた。



なんでもないこんな小さなお店の麺が美味しい。

Bangkok に到着した日に、む。さんに案内された大きなレストランのタイすきも美味しかった。



この日の午後から私達がタイを訪れた本当の目的の「奨学金授与式」の視察が始まった。先ず訪れたのは S・N の教育委員会の事務所だった。開始時間より随分早く到着したのに、既に会場は整い、席に座っている学生も何人かいた。時間どうりに授与式が始まった。教育長代理の挨拶の間、私は席に居る子供の顔を順に見ていた。どの子も純真でたくましい印象だ。そしてどこか懐かしい表情を持っているように感じた。

この日は授与式のあと家庭訪問をした。奨学金を受けている生徒の中でも経済的に貧しい「デュイ」ちゃんの家にお邪魔した。車で1時間程走って到着した家は、私達日本人には想像も出来ない貧しさだった。藁ぶきの屋根に柱と床だけの風が吹けば飛んでしまいそうな粗末な建物に、お母さんと、お母さんの弟と、3人で住んでいる。私は「デュイ」ちゃんの暮らしにも、未来にも絶望に似た苦しさを感じた。

以前、フィリピンの貧しい村を訪れた事があるが、その時、「人は貧しいだけでは不幸ではない」と感じた。フィリピンでは履物もない暮らしの中でも、幸せに生きているのを垣間見る事が出来た。

「デュイ」ちゃんの母親は農家の手伝いなどをして、日当を稼ぐくらいしか仕事がない。同居の弟は身体障害者で働くことが出来ないと言う。「デュイ」ちゃんは将来学校の先生になりたいと言っていた。同行の校長先生の話では勉強も良く出来るらしい。この生活の中で後10年間、夢を諦めないで生きていくのはとても難しいだろう。

帰る時間になり、私たちはそれぞれに「デュイ」ちゃんに「がんばって」と声をかけて車に乗り込んだ。彼女の人生のあまりの重さに泣いてしまいそうで、別れ際に私は「デュイ」ちゃんの顔を見られなかった。

後でむ。さんから「デュイ」ちゃんは「涙ぐんでいた」という言葉を聞き、胸が押しつぶされそうだった。別れ際に「デュイ」ちゃんと目を合わせていたら私は彼女を抱きしめて泣いただろう。

以来、「デュイ」ちゃんが頭から離れない。



翌日 Mukdahan での授与式は私達夫婦が挨拶することになっていた。

一般的な挨拶は夫に任せて、私はとっさに「日本語入門」のレッスンをすることにした。簡単な挨拶程度だったが授与式が終わって帰り際に数人の子供たちが「さよなら」と声をかけてくれて嬉しかった。

午後には Nakhon Phanom に移動し、ここの授与式では、同行した関本利英さんが扇舞を舞った。そ

の後踊りが得意な女子学生がタイの伝統舞踊を音楽なしできれいに踊ってくれた。思いがけない伝統芸能交流が出来た。



今回のタイ訪問は今までに経験したことのない大勢の人々との出会いがあった。タイは「微笑みの国」と言われているが出会った全ての人々が優しく穏やかに微笑んでいたように思う。お世話になった教育委員会の皆さん一人一人の笑顔を忘れないでいたいと思う。そしてなにより「デュイ」ちゃんのような子供が夢を諦めないで生きていくために、何が出来るのかを、考えたいと思う。

援助なしで生きていける力をつけるために、私たちが今できることは何になのか、答えの出ない難しい問題だと思うが、一つずつ、一歩ずつ出来る事を始めていくしか、私には方法が見当たらない。

今回の私達の参加を初めから応援して下さいました大矢さん、キャンヘルプタイランドの運営委員の皆様ありがとうございました。バンコクでお世話になった西川会長にもお礼を申し上げます。そしてS・N、M・H、N・P ではムさんのおかげで素晴らしい出会いがあり、知らない世界を見せていただく事が出来ました。私たちにとってこの旅は終わったのではなく、始まりです。これから皆様のお力を拝借して「すみれ基金」を充実したものに育てていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

### 2010年度奨学金授与式同行記一3

2010年度 奨学金授与式

報告者：亀山（タイ在住）

2010年の奨学金授与式が6月29日～7月7日、行われる事が5月に連絡が入りました、イサーン11県を廻る予定との事。私は皆様がボランティアで学校、学生の支援をしている、東北地方、イサーンのロイエット県に暮らしています、

2007学校建設支援の為ロイエット県、ブンガム学校に皆さんが来た時賛同してボランティアに参加、入会しました、建設支援のボランティアには3回参加しましたが、奨学金授与式の参加は初めてです、6月30日にはムクダハンのホテルで皆さんと再会出来た事本当に良かったです、7月1日、皆さんとムクダハンの教育委員会に行き授与式に参加させて頂きました、授与を受ける子供とその家族が時間前から待ちました、授与は委員会の前で一人一人に渡しています、

イサーンはタイの中でも1番の貧困地、日本の終戦後と同じ風景の田舎と現実社会を重ね合っているのがイサーンです、貧富の差はあります、田舎の村に入ると電気も無い、家畜と同居の家族もある、貧しさです、2009イサーンの平均年収は43000バーツと聞いています120000円1ヶ月10000円です、飽くまでも平均です、此れ以下の家庭が多いです、

その子供達にとって日本からの支援奨学金が授与される、授与されるまでには、色々な過程を通った子供達だけかもしれないがキャンでは今年は、11県、約230名に奨学金の授与を行った、

7月1日ムクダハン、7月4日にはロイエットの授与式に参加しました、7月2日には2007建設支援をしたロイエット、ブンガム学校を訪問メンバーの大矢さん、ムさん、は3年ぶりに先生、子供達と喜びの再会でした私の家はブンガム学校から10分くらいの所ですからイサーンの貧しい暮らしが実感して来ます、貧困のイサーンから抜け出る道は奨学金で勉強している子供達が頑張るしかないのか、働ける所が無いでは貧困からの脱出は無い授与式に参加された会員の皆様、本当にお疲れ様でした、此れからも支援が続く事、そして、キャンヘルプの発展を祈ります。

## 連載

## ～石井さん（運営委員）のタイ豆知識 Vol.1～

## タイのこと（雑学）

あなたはタイのどんなことを知っていますか？ またどんなことを知りたいですか？私は、タイに関する専門家でも、研究者でもありません。若いときに聞きかじった「タイ語」を、タイ人並に話せたら・・・の思いから、仕事のストレス解消も兼ねて（読み・書きは73歳を過ぎてから）独学で始めたものです。楽しく学ぶ為に目標や期限を定めずに、気が向いた時に気の向いた分野の情報収集を「ポチポチ」と続けています。その中から自分で「確かめ」理解出来るもの、納得できるものをノートに書き留めておいたものです。

（書く作業をしないと、頭には残らないようです。）昔と違い「情報」は、選択に迷うほど有り溢れています。その裏付作業も時間が掛かります。間違いや勘違いがあるかも知れません。その際にはご指摘頂ければ幸いです。（タイ語は、カタカナ表記出来ない言語です。出来るだけタイ語に近い表記をしました）

## タイの東北地方（予備知識）

タイ国を訪れる外国人の筆頭は日本人で、年間100万人（全体の10%）と言われます。

最も今回の「赤服＝スア・デー（ク）」暴動で、GW期間は30%強の減少だったようです。しかもリピーターが多いのも日本人です。が、大多数は首都バンコクを中心に、近郊の古都アユタヤそしてリゾート地のプーケット・サムイ・パタヤ等にしぼられます。CANの活動の中心東北地方は、残念ながらガイドブックには取り上げられず、この地に足を延ばす人は観光目的よりも、大都会では味合えないタイの原点とも言うべき、「風景」と「ナム・チャイ・ノーン（ク）ピー＝直訳（水の心・兄弟）」と言った「人間愛」に触れる、喜びを感じる人達に限られているようです。タイ国の地図を見ると、象の顔の形に見えます。その耳の部分「東北地方」です。日本からの飛行機が、内陸部に進入するとまもなく眼下に茶褐色の大蛇が、大地をはって行くかの如き光景が目に入ります。これが彼の「メコン川」で、その西岸地区が「タウン・オー（ク）チュアンヌア＝東北地方」です。総面積・人工共に全国の1/3を占めます。タイでは昔からこの地を「イサーン」と呼びます。この名は東北の方角を守護するシヴァ神を意味する、サンスクリット語（古代インド語）の「イーシャーナ」のタイ語訛り音なのです。

## どうしてイサーンは貧しいのか

メコン川西岸に広がる海拔150m～200mの「コーラート高原」は、岩塩層の上にあり年間降雨量は1,200mmと少なく、旱魃と洪水を交互に繰り返す土地柄です。乾季には、「飲み水」の確保にも苦労することもあり、30年程前までは各家に大きな「瓶」があり「雨水」を貯めて使用していました。瓶の中には「ルーク・ナム（水の子）ポウフラ」が住み、瓶を叩いてポウフラを沈めてから使うことも経験しました。昔ビルマの勇猛果敢な「クラー族」の商人が、あまりにも過酷な地を通過するのに泣いた。ことからこの荒涼とした高原野を「クラー・ローンハイ＝クラーが泣いた」と呼ばれています。そのため土質も悪く、農業生産性の極めて低い地方なのです。その反面（或いはその所為か）僧侶数・寺院数は、全国登録の約半数が集中しています。（生産性が悪いのに非生産者が多い）当然貧しい地域になります。緩い起伏の続く高原の高みは、疎林としての残し水牛や牛の放牧地として利用され、タイ国第一の生産地でした。現在では「役畜」としての需要が無く（耕運機＝クボタが代名詞）代わりに「サッポロ＝パイナップル」や「キャッサバ＝タピオカ（加工品）」栽培がのびています。1980年頃までは、タイは様々な意味で「農業国」でした。その後工業生産にとって代われ、また輸出に占める地位も低下し、2,000年の統計では農業就業人口は

45%で、GDPの11%を占める状態です。バンコクと園周辺地区との所得格差は、3倍とも言われています。しかし実際の生活水準は、物価・諸費用面から見ると、数字が示す程ではありません。問題は「貧しい」とは、何を指して（基準）言うかでしょう。日本人から見た貧困とタイ人の見た貧困とは、かなりの違いがあります。タイ人が良く口にする言葉に「サバーイ＝快適」「サヌツ（ク）＝愉快」があります。これがタイ人の人生の基本であり、現国王「ラーマ9世」が良く国民に向けて「足るを知る経済」と説いています。この辺の話はまたの機会にしましょう。CANのパンフレットに「プアー・ディクタイ・ナイプーン・ティー・ヤーク・チョン」非常に貧しい地方のタイの子供のために。とその目的が書かれています。戦後「経済的発展」のみを追求してきた日本人も、この辺で過去を振りかえり、政治家任せではなく個々人が将来を真剣に考える時期でしょう。

### タイ人の姓名について

タイでは、100年前は高貴な家柄の者以外「姓」（ナム・サクン）を用いる習慣はありませんでした。日本でも、一般人が姓名を持つようになったのは、明治8年（西暦1875年）でした。1912年時の王「ラーマ6世」（ワチラーウッド王）の命で、一般タイ人も「姓」を持つようになりました。タイ人の姓名は、「長く・読みづらい」ので、短い「ニックネーム」を使う。と尤もらしい事を言う人が居ます。確かに長くて読みづらいです。特に中国系タイ人に多く見られます。（これについては又の機会に）しかしそれは間違った解釈です。実は「姓」は無くても「名前」（チュー）は、もともと誰にもありました。タイ人は通常「チュー・レン（直訳遊び名）」で呼び合います。これは「ニックネーム」とはチョット違います。そして自分より目上には、兄弟でなくても「ピー＝兄・姉」を、目下には「ノーン（グ）＝弟・妹」を付けて、呼びます。親族の呼び方は日本と同じように「父・母・お祖父さん・お祖母さん・叔父叔母」と呼びます。他人でも親しい間柄では同じように使います。この呼び方で人間関係が良く判ります。さて、本題の「チュー・レン」ですが、タイ人の話をお聞きになった方は、呼び名が「オーイ」「ノーイ」「ウアン」「ナム」「サーイ」やCANと関係のある「む」さんと、みんな簡単な名にお気づきですね。実は「チュー・レン」は、「精霊信仰」からきている、タイ人にとって非常に重要な事柄なのです。

### 「アニミズム」の世界観

タイ人は「精霊信仰」の強い国民（民族）です。それは「日常生活」の中に深く溶け込んでいます。

「精霊」とは、所謂「ピー（お化け）」の世界です。（発音の違いで  $\text{ปี}$  兄・姉  $\text{ปี}$  年があります。）ピーは、守護霊・中立霊・悪霊と、森羅万象にあり、特に象徴的なものは土地神（サーン・プラプームチャオ・テイ）です。バンコクの中心地にある「エラワン・ホテル」の建設時に無事を祈って造られた、「土地神」のお蔭で無事完成したことで、この「土地神」が一躍有名になりました。バンコクを訪れた方は、大勢のタイ人がここを参詣する姿を目にした事でしょう。

เจ้า 神・主人（発音の違いで เจ้า 朝  $\text{เจ้า}$  民族・住民）

それでは、次にこの「ピー」について話をしましょう。

### 「ピー」とタイ人の関わり

生まれたばかりの子供は、「ピー」の子供である。と言う「民間信仰」があり、タイ人にとっては極めて重要な事であり、人生の節々で深く関わっています。

○「ピー」は、自分の姿に似せて模った粘土を、「母親」の胎内に入れることで、母親は「懐妊」する（ピーの子を宿していることになる）と信じられています。

○子供を出産すると、3日目までは人の子では無く「ピー」の子供と考えられています。○この3日間を無事に過ごすためには、「ピー」の目を欺く必要があり、(ピーに連れ去られる事は死を意味する)この3日間は、人間の子供を生むために大事な期間になります。○欺く手段は、目立たない(ピーに注目させない)ように、汚い・その辺にあるチューレンを、つけ目をそらさせるのです。(昔は僧侶や村の長老が名づけた)  
○基本的には、誕生日の曜日・時間によって「バリー語」の頭文字から決めますが、現在は親(親族)が、適当に思いついた名(1音節か2音節)をつけています。昨今では当然「タイ語」で、ピーに目を付けられるような名や、外国語(英語が多い)も多くなっています。現代人の「信仰度」が、垣間見られます。しかし「日本人」が、「十二支」「血液型」「星座」を良く判断材料にします。が、タイ人は「誕生日」が重要で、誰でも承知しています。(曜日の色も)

### กวน (クワン) 生霊について

無事3日目を過ぎ4日目で、人間の子供となります。(「ピー」の所有から離れる)

○人間になると、「クワン=生霊」が宿るとされています。一人の人間に、それぞれの身体部分32箇所にそれぞれの「クワン」が宿ることになります。

○「クワン」が、確り体内に留まっている(無病息災)ためには、「クワン」を如何に強化し体内に繋ぎ留めるか、タイ人は一生を通してこのことに腐心します。

○その手段が「タツ(ク)・クワン=すくう・汲む」や「サーイ・シン=聖糸」と、常に「タム・クワン」を、その重要な節目節目に実行します。

○3日目の儀式は「タム・クワン・サン・ワン」と言い、タイ人は3の数字を「吉祥」とし、タイ人の好む「9」は3×3で、国家行事でも「9」のつく日が選ばれます。

運営委員 石井 満

### 運営委員会

(2010年5月~2010年7月)

活動	月日	場所	内容
運営委員会	5月22日	事務所	奨学金授与式について
運営委員会	6月5日	事務所	すみれ基金について 奨学金アサイン作業
運営委員会	7月24日	事務所	奨学金授与式報告

### 運営委員募集

一緒にキャンヘルプタイランドの運営に参加してみませんか?

通常は毎月第4土曜日に事務所に集まり、会の運営について話し合っています。見学でも結構ですので是非事務所へ遊びに来てください。

次回の運営委員会は **8月28日(土) 13:00~** (事務所にて) です。

### 編集後記

#### ▼ 事務局からのお知らせ。

平成22年7月10日付けで23,000円を千種郵便局からお振込みくださいました方のお名前の記入がございませんでした。心当たりの方は事務所へお電話、又はお手紙でお知らせ下さいます様ご案内申し上げます。

また、奨学金支援者の方で、手紙の翻訳や奨学生へのプレゼントの送付、個人的支援などをご希望の方がいらっしゃいましたら、お手伝いしますので事務局までご一報ください。

<キャンヘルプタイランドネットワーク通信 Vol.50>  
発行 キャンヘルプタイランド  
発行人 西川 弘達  
編集人 坂 茂樹  
発行日 2010年7月31日  
住所 〒450-0003  
名古屋市市中村区名駅南2-11-43  
NPOステーション内  
Tel & fax 052-566-5131  
(OPEN: 毎週火、木・土曜の13~16時頃)  
E-mail: canhelp@npo-jp.net  
ホームページ: <http://www.canhelp.npo-jp.net>